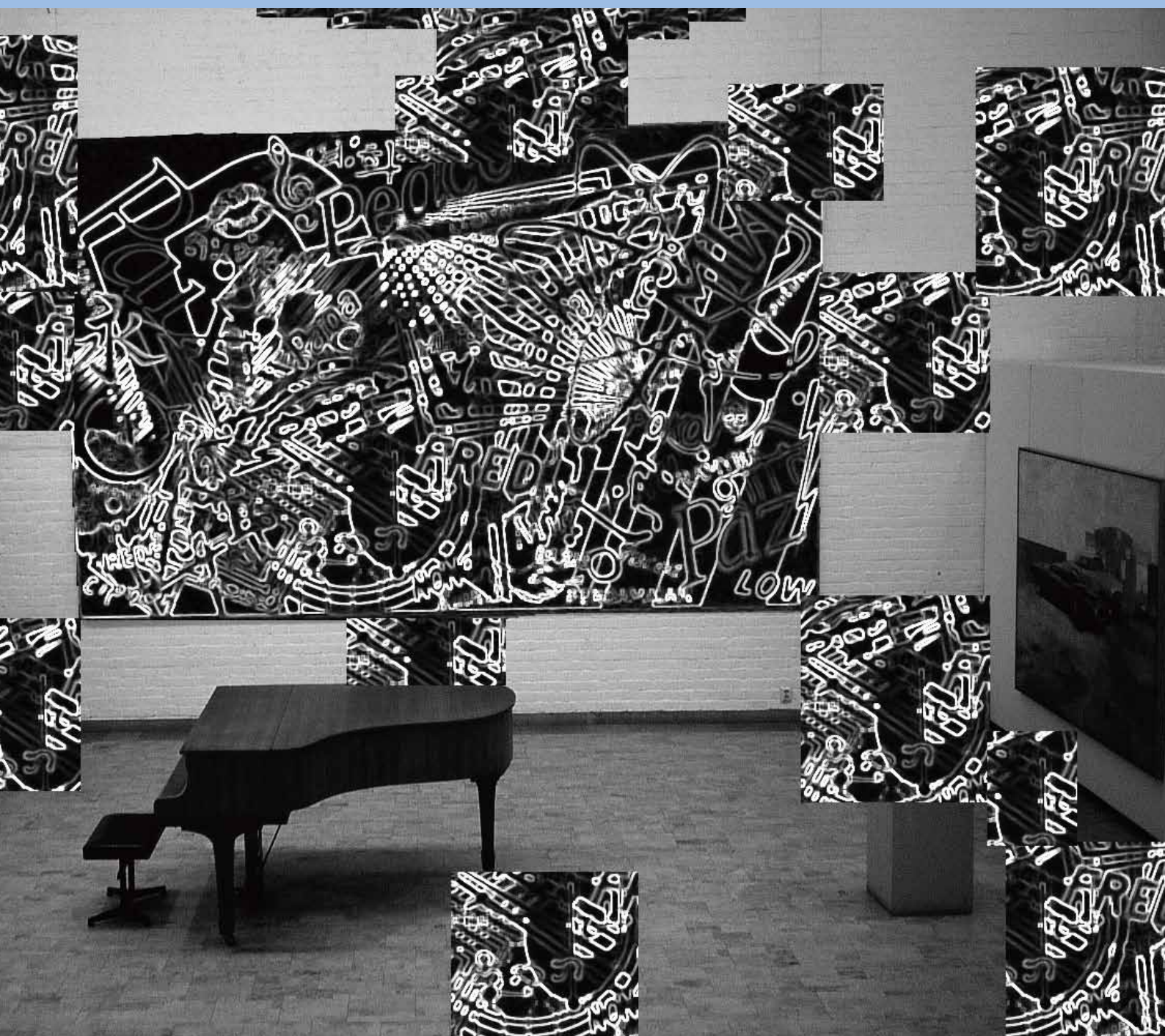


連文

R E N B U N



Vol. **111**
2021.8



船出に際して…。

久留米連合文化会会長 内野 博夫



戦後間もない昭和二十四年に創立された久留米連合文化会は、七十二年という永き航海に傷つき荒海で彷徨っているのか、与えられた文化に満足し風を装う波間で老朽化に戸惑っているのか…。

会員の皆さんとともに、再び久留米連合文化会の本来の理念を共有し、進路を見失っているように見える船の行く先を見定める為に、平成十二年、故納戸健次氏（氏の連文への多大な貢献には感謝しています。）と共に五十周年記念誌上に「連文への道」（岸田勉）、「久留米気質と画壇」（丸山豊×内野秀美）、「緑の追想」（丸山豊）を記念誌作成実行委員として掲載し、また平成二十二年六十周年記念誌上で実行委員長として「緑の追想（招待の記）」の再読をお願いしましたが、この文章はその後も広報委員会によって会報

誌上で度々再掲され、会員の皆さまへの意識の変革が促されてきました。しかし、広報委員会の危機にもかかわらず、船はいまだ波間に漂っているばかりのようです。

過去の会報を遡ってみると、この間の広報委員会による動きだけではなく、二十数年前から会長による会員の高齢化への危機、組織の拡大が喚起され現代の文化状況に対応した組織の改編が要請されてきたことがわかります。それは、改善検討委員会、規約改正委員会による運営体制の刷新を経て、総務委員会の廃止、企画運営委員会の新設、会員各位へのアンケート調査、総合文化部門の新設、そして青年部委員会の新設へと続きますが、ここ数年、改革を要請する文章も見られず、広報委員会による提言のみが繰り返されているのが現状のようです。

しかし、これらの対応も船の老朽化を止めるには有効であったとは言えません。平成十五年、八百四十九名であった会員数は本年度には五百八十六名まで落ち込んでいます。特に令和元年度には、邦楽部・民謡部において一門による集団での退会や邦楽部の激減、民謡部の消滅という事態を招いています。いったい何が原因

だったのでしょうか、傷ついた船体を修復するためには原因調査が求められます。

（招待の記）には「会が今もつともおそれているのは、当地方の文化人としての触覚、意志、熱情を有する人々にたいして、漏れなくしかも充分に礼をつくして、入会の招待を行ったであろうかということである。」「郷土の文化的啓発運動は興味としてではなく、責務として、文化意識にみちたすべての人々によって遂行されねばならぬはずである。世代・職業・流派などの差別なく、多数の有志がすすんで入会されて、文化の会の中核からこれをゆさぶるような強烈な実践をしめてほしいと願っている。」（傍点筆者）と書かれています。これらの言葉は、船の進むべき進路を指し示しているように思えます。

「連文への道」「緑の追想」の話になると「あのころとは時代が違つ。」という話をよく耳にします。しかし久留米連合文化会が連合文化会であるためには、忘れてはならないことに違いはありません。連合文化会という船のクルー（乗組員）を求めて、幾度か数名の知人に入会の勧誘を行ってきました。その中で反応は「連文は船の中に座っているだけの集団。」「入会すれば、ただ船を漕がされるだけ。」「といったものでした。これは前述の本来あるべき精神から逸脱したものであると言わざるをえません。特に後者は、

文化という荷を積んだ船として、そう言わせてしまうことは甚だ遺憾なことだと思えます。

「文化の会」「久留米連合文化会」の前身として、戦前に結成された『リベルテの会』の会の言葉として次の一文があります。「各自の良心による輪と進歩的主知的な精神による不文律によりむすばれて、——中略——奇矯過激を排し出来るだけ平静な計画を立てて、会の使命を遂行しようとしているものです。」「会員中にヒットラア君をおくようなことは最も排撃している次第です。」「台頭するファシズムに抗し自由と文化を守るため、腹の底から発せられた言葉です。私たち連文の会員も肝に銘じるべきではないでしょうか。」

先日行われた、理事会において指摘された事柄「安易な拡大解釈による規約の適用」「正副会長会議による「理事会・総会の軽視」会員によく理解されないままでの規約改正の頻発」等、是正を余儀なくされていることは山積しています。総合文化部門の新設についても、会員の理解を得ているとは言えません。総合文化部門内の各部は、既存の部門へ充分包含され得るものです。会報七十四号で当時の西日本新聞総局長の古賀和裕氏は、ノーベル賞受賞者が京都に多いこと、それは京都という町の規模が分野を超えた意見交換を可能にしていることを例に挙げ、当時、美術部門内で部が分割されたこと

を残念がつて話されています。これは、連文本来の趣旨を忘れ、座礁しかねないことを憂慮された言葉だったと思われます。これからの時代は、情報の提供が要求される時代です。正副会長会議ならびに、各委員会の審議内容を、委員の出欠も含

めホームページ上で公開し、会の決算報告も収支の視覚化を進め、総会において解りやすく説明を行いたいと思います。様々なジャンルで文化的活動を行っている有志は、年代を問わずまだまだ大勢います。ただ、今の連合文化会に新たなク

ルーとして彼らを招待する席がないことが原因なのか、あるいは敢えて席を設けずにいるのか。検討・改革が求められています。年齢七十二年の久留米連合文化会という船舶のオールをしっかりと握りしめ、クルーで

ある皆さんの協力を得て一緒に新しい海へ乗り出したいと思います。
新しい水夫にこのオールを渡すその日まで。
※「連文への道」「久留米気質と画壇」「緑の追想」は連文ホームページ上で公開されています

令和3年度

定期総会 書面決議

4月16日に旧理事会は対面で終了。後に4月末日対面での総会案内を通知したが、久留米市内で新型コロナウイルスが急拡大、福岡県に緊急事態宣言が発出され収束の見通しもないため5月22日の対面での総会は中止し、感染拡大防止のため総会議案について書面決議とした。

●5月28日開票

会 場：連文事務局

開 票：事務局

立会人：深野 亨輔・仲正彦

総数397票

●1号議案

令和2年度久留米連合文化会事業報告
並びに決算承認（監査報告）

承認する389票、承認しない6票

●2号議案

令和3年度久留米連合文化会事業計画
及び予算（案）

承認する389票、承認しない6票

●3号議案

役員改正（案）

承認する387票、承認しない8票

第1回 正副会長会から

日時：6月2日（水） 於：連文事務所

出席者：会長／内野博夫 副会長／隈恭徳
文芸リポート出席・井上泰三（美術）・末永
皎秀（華道）・岡宗幸（茶道）・才田亜希子（総合文化）
欠席：齊藤彰（舞台芸術）

「報告」

●理事けしけし祭アンケート調査報告

高良大社10票、青木繁旧居3票、

篠山神社1票、兜山1票

●久留米市芸術奨励賞選考委員の推薦について（5名）

内野博夫（美術部門）、隈恭徳（文芸部門）、末永皎秀（華道部門）、岡宗幸（茶道部門）、才田亜希子（総合文化）

●連文会報誌110号について経過報告（木村元会長からの申し入）

●会長充職について

●連文事業の簡単な説明

総合美術展・ジュニア青木繁展・ジュニア文芸大会・久留米文学・けしけし祭
●他団体と連携し実行委員会形式で実施している事業

●12月5日子どもから大人のための天文学講座

●12月12日被災地支援コンサート

●北筑後ブロック協議会について（今年度事業 三潆・城島地区11月7・8日）

●久留米・合肥40周年記念事業について

9月久留米市美術館1F

内野博夫会長、井上泰三副会長で対応
●久留米市功労者について 川口博子さん

●久留米文化推進協議会入会の勧め

●各種委員会を開催し正副委員長を決めて頂くことについて

●予算委員会 委員長……権藤元二郎
副委員長……田中宗俊

●広報員委員会 委員長……吉本暢子
副委員長……今村好典

●青年部委員会 委員長……宇美拓哉
副委員長……藤間勘志龍

「当面の課題」

●対面での表彰式が出来なかったためコロナの状況を見極めて年内に表彰式の実施

●来年5月総会時 2年分合同で実施

●企画運営委員会について 検討

●連文ホームページの活用について 若い人を活用

●正副会長会の市長への挨拶はコロナの状況を見極めて予約

●規約改正委員会について今後検討

110号（前号）理事会の記載の内容について、石山前副会長より申し出があり、事実誤認が拡散するといけませんので2点だけ訂正します。

①「企画運営委員会から隈氏が解任された」の発言は事実と異なります。

②「反対すると会長から呼びだされて怒られる」の部分は伝聞であり、事実確認をした訳ではありません。

正副会長会

座談会 要旨

7月20日、正副会長会議の後、そのまま座談会を催しました。
今後の連文の運営について積極的な意見が交わされました。

〔日時〕2021年7月20日

〔於〕連文事務局

〔出席者〕

会長 内野 博夫 (彫刻)

副会長

文芸部門 隈 恭徳 (小説)

美術部門 井上 泰三 (書道)

舞台芸術部門 齊藤 彰 (洋舞)

華道部門 末永 皎秀 (華道部)

茶道部門 岡 宗幸 (茶道部)

総合文化部門 才田 亜希子 (ステージ文化)

FA (ファシリテータ・進行係)

今村 好典 「広報委員会」

(映画演劇)

会員数の減少

■内野：かつては800名以上の会員数があった連文ですが、今は580名余りと衰退しています。会員による会費をベースとする連文ですが、会員減は即、連文としての文化活動の制限につながります。それにせつかく入会した若い会員さんがいつの間にか離れていく、といった状況もあるようです。これは連文という組織の魅力がなくなっているのではないかと危惧されています。

■井上：理事会は連文の議決機関であるのに、一度も話を聞かないまま、いつの間にか部の創設がなされていた。たとえば書道の中でも、篆刻、調和体、漢字、かな・・と分けようと思えばいくらでも分けられる。これを全部、部として独立

させたらどうか？などという極端な話も出てくる。しかし、こういったことが行われれば、連合文化会そのものが解体してしまうし、何より建設的ではありません。やはり新しい部の創設については年数をかけて慎重に行わないと、上の方の何人かで決めてしまうというやり方には問題があると思う。

■岡：茶道部の会員数減も大きな問題です。またおっしゃるように活動内容は既に決まったことと受け入れるだけに終始していましたが、やはり一人一人がきちんと問題を認識して意見を述べるという議論の場が大切だと思います。

■齋藤：会員数は直接連文としての活動費に直結しますが、だからと言って窓口を広げて、どなたでも、ということをやればやるほど連文としてのステイタスは落ちてゆくでしょう。いかにして会員増と今のみなさんの高邁な文化活動を両立させていくかは、よく考えなければなりません。個々の文化活動にかかる費用については、皆さん自前でやっていらつしやいますが、才能や実力があっても必ずしも発揮できるというわけではない。またジャンルによっても条件は大きく異なる。文化活動としての作品発表を年に2回行う、などの縛りをつければ、およそ舞台芸術関連では不可能に近い。10年かかって素晴らしい作品を1本作る、というふうな方もいらつしやるのです。それぞれ

の文化活動に即した判断をしなければ本当の意味での公平性は保たれない。ジャンルによっては毎年一律ではなく、複数年を跨いだ予算配分をお願いしたりという働きかけができるいいなと思います。

■末永：現在の会員数では予算組みが非常に厳しい状況です。また、これまでは会議は報告会で終わっているような状況が見受けられます。各委員会がきちんと機能するような運営が必要でしょう

連文の存在価値

■才田：音大は出たものの、わたし自身はみなさんのように芸術を極めるという活動を続けてきたわけではありません。連文へのお誘いは、総合文化部という活動もあると言ったことで、わたしでも入れるのかなと入会を決めさせていただきました。久留米は文化の香り高い街としての歴史がありますが、最近では本当にそうになっているかと疑問に思うこともあります。

長い間、それぞれの芸術に打ち込むと言うことは素晴らしいことです。会費が高いと言われる方もそうでない方もいらつしやいますが、もっとたくさんの方が連文に興味を持ち、その価値をわかっているようにしていくことが必要だと思います。

■FA：会員相互の交流という点ではどのような意見をお持ちでしょうか。

■齊藤：文化活動そのものは、それぞれ個々のものであり、そうあるべきと思いますが、切磋琢磨しながらそれぞれの道に打ち込んでいても、やはり発表の場というものは必要なので、そこをうまくバランスが取れていけばいいかなと思います。

■内野：一般的に他団体では「〇〇文化連合」という名称が多いのですが、久留米は連合文化会と名乗っています。これは会の立ち上げの時にいろんな意見が出て、それぞれの文化活動はみなさん個々が担っていくものであり、それ自体は個人的な活動です。そんな活動をしている方達が一つに集って（連合して）、久留米に素敵な文化を創りましようというのが創立の趣旨です。文化連合ではなく連合文化会という所以です。また、上に立つ人間の資質がまさに今問われている。上位下達でなんでも決まってしまうという不満も出てくるのだらうと思います。

美術の世界などは一匹狼が多いですが、全く違うジャンルの方と意見交換をする、違う世界に触れる、そこからさらに新しい世界を紡ぎ出す、そんなことが本来の連文の魅力のひとつではないかと思っています。

■末永：予算を公平に毎年分けてしまうようなやり方ではなく、数年おきでまとまった予算を原資に連文ならではの事業を構築する。そんなことは個人ではできないことで、連文ならではの魅力の一

つになるのではないかと思います。1年に1回くらいはみなさんで意見を出し合って「今年はあれをやるう」と企画する、そんな意味のある使い方が必要です。また、公的な助成金だけに頼らず、個々でスポンサーをつけることも視野に入れていくべきではないでしょうか。

■内野：助成金を申請して何かをやるというのは一つのやり方ですが、勢い、外部の方を呼んでなんらかの講演会を行なうなどということが多い。そうではなくて連文の会員がやることに助成金を取って事業とする、ということにならないといけないのではないのでしょうか。

総合文化部門創設の経緯

■末永：総合文化部は、森会長時代に会員を増やすための一つの方策として立ち上げました。今は他と同列の一つの部門という位置付けになってしまっているが、創設の主旨は少し違う。

■内野：そもその発想は、いきなり正会員ではなく、準会員制度、あるいはジュニア会員制度のようなものを作り、そこでの経験を経て正会員になるという段階を踏んだらどうかということでした。そういう多ジャンルを包含した総合文化部を経て正会員獲得を目指すという発想でした。残念ながら今はそうならない。

例えば舞台芸術部門というのがあります



が、総合文化部門にもステージ文化部というのがある。これはどう違うのだろうという素朴な疑問すら湧いてきます。

■才田：わたしは総合文化に所属していますが、総合文化の定義というのがいまひとつわからないままで、一体何をするとこるんだらうという思いはあります。

■井上：会員数を増やすということを第一義に考えると、なかなか協力できない方が出てきたりします。例えば部で何かの事業を行うに際して、みんな協力してことを進めるというような場合、活動に齟齬をきたす場合があります。特に入会する際に同じ部の推薦ではない方が入られる際などは分断すら見受けられます。

■隈：他の部からの推薦は規約上認められないのではないですか。

■井上：しかし過去、上からの一言で正式な審査もなしで入会になったりした方も現実にはいます。いたずらに会員拡大を目指せばそういうことも起きてくるのでは。

■隈：総合文化部の創設については、きちんと総括を行うべきではないですか。（あん時はあやうった、）

こうやった論でちよつと紛糾・・・）

■FA：新しく入られた副会長さんもちょうしやるので、過去の経緯はきちんと情報を共有していただいて、その上で、誤った運営になった部分を精査し、魅力ある連文を作るために、何をなすべきかという議論を尽くすべきかと思っています。

総合文化部門が当初の目的から違う形態になったのなら、それらの議論を踏まえて、再定義するべきではないでしょうか。

■内野：すごく大事なことです。既に多くの会員さんが総合文化部門に所属して活動されている現状ですから、どうしても一番いいのかを納得がいくまで議論すべきだと思います。

連文に若い力を

■末永：今からは、魅力ある連文をどう創っていくかということを第一に考えながらやっていく必要があります。やっぱり、若い者が少ない。

■FA：人がいないわけではなく、久留

米には現役の高校生で文学賞を受賞するような才に富んだ人材もいます。彼らを育ててゆくというような意味においても総合文化の理念は非常に大きい。その定義を明確にし、単なる部門の一つではないという意義を会員が共有することはとても大切で有意義なことだと思います。

■齊藤：今はコンピューター文化の時代です。メディアでも本当に重宝される存在です。そういう新しいジャンルができていくこと、それを受け入れていくことはいいことだと思います。また、先ほど推薦の話がありましたが、こういう新しいジャンルの文化に対しては部門ではなく、同じ部からの推薦しか受け付けないというのも一考する必要があるように思います。

■内野：現行の規約ではそうですが、必要であれば規約の改正も含めて柔軟に対応できる組織を目指すべきでしょう。現実には今の連文にないジャンルも存在します。ただ、舞台芸術なら舞台芸術で、一つの大人数の部に参加されていても、程なく退会されてしまうということがあります。参加してみても、違和感を感じたりするのでしょ。うけど、美術というカテゴリーの中でも常に既存の枠ではない新しいジャンルが生まれてきています。新しい方の入会を促す時点で、そこをどう乗り越えていくのかということも考える必要があると思っています。

■末永：新しい分野ができるのはいいですが、かつてはカラオケ部だの酒道部だのという話が出たこともありましたが。何でもかんでも認めてしまうというわけにはいかないでしょう。それに、議決を有利にするために理事を増やすといった悪しき慣習は排除されるべきだと思います。

■FA：今日は座談会形式で活発なご意見をいただきましたが、この座談会にしても、そうそう何度も開催できるわけじゃない。だとすると、今年はどこから手をつけて何をやる、といったことは目標化した方が建設的です。予算の件などいろいろなご意見が出ましたが、せめて総合文化の再定義などは今年の目標に挙げられたらいかがでしょうか。

■内野：確かに総合文化の立ち位置など、所属している会員さん自身にも不明なままという状況はいち早く解消へ向けて動き出す必要があると思っています。また、予算の振り分けなど、どなたにもご理解していただけるよう、視覚化を進めたいと思っています。

■末永：年に1〜2回、この正副会長会と青年部・広報・予算委員会などの懇談会を催していただきたいと思います。会長に何でもかんでもお願いしていますが、副会長が内部的なことを進め、会長はもっと対外的な活動ができるような体制を作るのが本来の姿ではないでしょうか。

(文責：広報委員会 今村好典)

久留米光画会創立1115周年記念展覧会

●開催期間：12月7日(火)13時から12月12日(日)16時まで
●会場：久留米市美術館1階展示室

まずは、次に述べる出来事から当会の歴史を感じていただきたいと思います。その一つ、久留米光画会の初代会長、旧月星ゴム(現・株式会社ムーンスター)の社長、故倉田雲平氏の貴重なカメラ収集品約150点が日本カメラ博物館に収蔵されることになり、2009年にはその特別展「く名機から珍品まで」倉田雲平カメラコレクション」が開催されました。これには年代別に世界の代表的カメラやレンズなど約120点について見ることができました。そして一昨年は、ニューヨーク近代美術館における永遠の収蔵作品「漁後」(写真)を残された久保田翠嶺二代目会長に関する情報提供の依頼があり、その作品のことは五代目会長より聞いたことがあったものの、現実的に直面し驚きました。

さて今年、久保田精志郎五代目会長没後3年目であり、以来初めての展覧会が「115周年展」(本誌12月行



写真：MoMA Museum of Modern Art, New Yorkのウェブサイト
<https://www.moma.org/collection/works/48804> による

事案内)である。現在の光画会は、福岡・大牟田・朝倉・筑後・八女など、広域からの入会者が久留米地区会員より多く、入会後わずか2・3年の者から40年以上のベテランまでと、在籍年数の層も広い会員構成となっています。また、連文所属会員は総数21名中12名であり、会運営の基盤を担っています。そして、その会運営の方針は今も変わらず1世紀を超えて支えられてきているところです。このことは、鑑みれば月星ゴム写真部関係の方々や久保田家一族に率いられたことによるものであると言えます。

この先達の意を汲んでどのように伝統を受け継ぎ伝え地域社会に貢献できるのか、展覧会はそのことを考える契機とすべく5年に一回の開催を基本とされてきた。本会の特徴は数多くの国際サロン(朝日新聞主催)入選が大きな実績の一つとしてあげられます。さらに伝統としては、会員独自のスタイルを大事にした創作活動、それは初代会長の指導方針「自由で闊達な表現」にあります。連文会員の皆様にはご高覧いただき、会の活動や写真表現の一端を楽しんでいただければ幸いです。

(広報委員・中村金次)

久留米市東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプ ケニア共和国 文化で応援

6月28日荘島体育館2階で井上泰三さん（書道部）がケニアオリンピック選手に「入魂」「躍進」「必勝」「飛翔」等の書を100枚揮毫し、ケニア選手を励ました。



7月6日には箏（宮本直美さん）と華（末永皎秀・田中千舟・中野松芳・関靖子さん（華道部））のコラボ動画撮影（今村好典さん（映画演劇部））を久留米シティプラザスタジオ3にて行いました。コラボ動画のDVDと日本舞踊（花柳三枝君さん（日舞部））のDVDを7月8日に久留米市へ届けました。



7月12日に大久保勉市長が連文事務所に来られ連文のケニア選手に対する日本文化での応援に謝辞を述べられました。

（事務局）



第55回 仲縄忌俳句大会

第五十四回は、コロナ感染拡大防止のため中止となり、二年ぶりの仲縄忌でした。

遍照院の庭園には、いつものように振花が見られましたが、境内での法要や接待はなく、いささか淋しい忌日となりました。午後一時より、えるピア久留米にて、俳句大会を行いました。

選者三名の特選句（◎）佳作句は次の通りです。

後藤隆選

◎一輪の蓮は以白の分身か

大力 妙子

梅雨寒き明けの自刃と傳へ聞く

矢野 愛子

墓前祭参列出来ず寺薄暑

大日方 明美

吉田 いずみ選

◎空梅雨の一燭もなき志士忌日

大島 シゲ子

萩若葉さゆらぎ今日は以白の忌

大日方 明美

万緑の極まりし日や仲縄忌

野口 桂子

宮崎 みゆき選

◎萩若葉さゆらぎ今日は以白の忌

大日方 明美

墓前祭参列出来ず寺薄暑

大日方 明美

忌祭なく万緑静まるばかりなる

大島 シゲ子

（俳句部・野口桂子）

第80回水彩連盟展 文部科学大臣賞 宇美拓哉（洋画）

80回を迎えた水彩連盟展にて文部科学大臣賞を受賞し誠に嬉しい限りです。未知のウィルス蔓延に変わる死生観、大切な何かの手から溢れゆくような感覚、自分を問われた一年でした。その想いを人物の目線、又自由に飛び回る蝶と羽、体がバラバラになりながら落ちてゆく蝶を象徴とし画面に閉じ込めてみました。



「ミスト」
F100 アクリルミクストメディア

第107回光風会展 光風会会員賞 秋山るみ子（工芸）

コロナに阻まれ、昨年出品出来なかった作品を、新たな別のモノとして、満を持して染め上げました。染と洗いの繰り返しから、ひっそりと産まれて出でた空、太陽、森、そして畑と畦畔。真紅の太陽を欠き裂く黄色が終焉の兆しなのか、あるいは再生への希望の光なのか、これが今の私の心象風景に他ならないのです。



「春光」

日誌●報告 2021年(令和3年) 1月～7月 report

九州宝生会定期「初春能」	1/17(日)・久留米シティプラザ 久留米座
第48回久留米謡曲連盟謡曲大会	1/23(土)・久留米シティプラザ 久留米座
第5回喜多流「久留米座」能	1/24(日)・久留米シティプラザ 久留米座
第28回ふくおか県民文化祭2020 春のシンフォニーin久留米	2/19(金)・久留米シティプラザ 久留米座
LEADバイザーロビー展 元谷京子書作展	3/1(月)・31(水)・筑邦銀行本店
第9回久留米連合文化会 水墨画部展	3/2(火)・7(日)・久留米市一番街多目的ギャラリー
第21回日本水彩久留米福岡支部展	3/16(火)・21(日)・福岡市美術館ギャラリーIBCD室
第37集「久留米歌壇」発行	4/1(木)発行
玉垂宮献茶(表千家不白流九州支部)(野点)	4/11(日)・玉垂宮
久留米文学第68号発行	5/1(水)発行
水天宮献茶(表千家不白流九州支部)(野点)	5/3(祝)・水天宮
第74回示現会展福岡展	5/11(火)・16(日)・福岡市美術館
第4回祥雲習作展	6/8(火)・13(日)・久留米市一番街多目的ギャラリー
第55回仲縄忌俳句大会	6/27(日)・遍照院・えーるピア久留米

●芸術散策●行事のお知らせ 2021年(令和3年) 8月～12月 information 水天宮献茶(表千家不白流九州支部)(野点) 久留米児童合唱団第50回記念定期演奏会 フジタバレエ第35回バレエリサイタル 第40回水墨画心象会展 大日本茶道学会「第35回福岡地区研修会」 観月茶会(裏千家淡交会久留米支部) 第67回連文茶道部大茶会 第70回久留米市総合美術展 第50回連文会員美術展 第23回短歌部歌評会 高良大社献茶(表千家不白流九州支部)(野点) 第3回総合文化部門展 第72回西部示現会展 日吉神社献茶(表千家不白流九州支部)(野点) 総合文化部門第5回文化講演会 「日本蜜蜂 驚くべき生態と私たちへの教訓」 第74回久留米茶道連合会法要大茶会 第33回南祥会書作展 第68回桃青忌俳句大会 裏千家淡交会久留米支部第67回歳末助け合い茶会 久留米光画会創立115周年記念展覧会	8/6(金)・水天宮 8/9(月)・石橋文化ホール 8/22(日)・久留米シティプラザ ザグランドホール 8/31(火)・9/5(日)・久留米市一番街多目的ギャラリー 9/11(日)・大濠公園(日本庭園) 9/18(土)・久留米シティプラザ 9/26(日)・久留米シティプラザ 10/6(水)・24(日)・久留米市美術館1階 10/6(水)・24(日)・久留米市美術館1階 10/9(土)・えーるピア久留米 10/10(日)・高良大社 10/26(火)・11/2(木)※10/31休館・えーるピア久留米 11/9(火)・14(日)・久留米市美術館1階 11/11(木)・日吉神社 11/13(土)・えーるピア久留米301・302 11/14(日)・梅林寺 11/23(火)・28(日)・久留米市一番街多目的ギャラリー 11/23(祝)・上津町コミュニティセンター 12/5(日)・久留米シティプラザ 和室他 12/7(火)・12(日)・久留米市美術館1階
--	--

謹んでご冥福をお祈り致します。

松永滋さん (華道部) R3年2月10日
井寺 斉昭さん (写真部) R3年2月14日

一木 宗経(経男)さん(茶道部) R3年4月5日
坂田 正信さん (写真部) R3年5月9日

No Art, No Life No Life No Art [2021 広報キャンペーン]アンケートについて

先日行いました広報キャンペーンのアンケートについて、貴重なご意見を寄せていただき、ありがとうございます。
アンケート結果についてご報告いたします。

回答率は約10%となり、紙ベースでの回答が約6割、残りは Web 上での回答でした。もっとも多く回答いただいた部門は華道部門でした。次いで美術部門、茶道部門となりました。

●2020年度文化活動のコロナウイルスの影響については、例年より活動できなかったと回答した方が87%となり、文化活動に制限がかかっていた状況でした。

●新しい生活様式により、文化活動に良い影響を与えたことはありますか？という問いについては、影響はなかったという回答が92%でした。反対に悪い影響についてはコミュニケーションの機会が減り、文化活動が制限された方が73.6%、リモートツールやスマートフォンが使えないため、文化活動が制限された方、文化活動の収入が減少した方がともに18.9%となり、新しい生活様式の悪影響が懸念されます。連文会員による交流活動・コラボ活動に興味がある方は88.9%と多くの方に興味を持っていたことができました。ただし、自身の文化活動や私情により参加できない方が 51.9%でした。

●最後に「ご意見いただいた内容として、連文をよりよくするために、会員のメリットを求める声や異なる部門を認め、尊重しながら参加し、会員を大切にすることを、新たな時代の到来により連文の基本活動方針や組織改革の議論の場の提供を求める声もありました。

この結果から、コロナ禍で文化活動に

制限がかかり、思うように動けなかった方が多くいることが見受けられます。この現象を解消するためにも、今後の我々の文化活動の在り方を見つめ直すときと感じました。

今回、初めての試みだったアンケートは回答方法や回答率を見ると会員の主体性に課題があると考えました。アンケートは任意でしたが、連文への意見を述べることでできるひとつのチャンスをもとに思いましました。また、新しい生活様式の時代が到来している中、紙ベースでの回答が多く、Web 上での回答が少ないということは、文化活動を続けていく中で大きな壁になりかねないと懸念します。今、我々は変化の時を迎えていると思います。文化活動のあるべき姿を常に考え、自身や周囲、社会へ良い影響を与えるべく動いていけることが理想であると考えます。変化を望まないことは衰退、先細りになりかねないため、これを避けるために今、連文は変わらなければならないことを恐るべきです。連文という会は異なるジャンルが一つになった組織であり、その良さを十分に活かすには、連文会員による交流活動が効果的であると考え、意見を求めました。興味がある方が多くいらっしゃいましたので、ぜひこの活動を新たに取り組みできればと考えます。

新しい活動にはエネルギーが必要で、そのため、多くの方々からの意見取り入れ、連文の発展につなげていきたいと思ひます。

今後もアンケートは定期的に開催してまいりますので、多くの方の声をお寄せください。引き続き、よりよい連文づくりを尽力してまいります。

(広報委員会)

